国立大学法人
長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

プレスリリース

令和２年１月１７日

長崎大学がコンゴ民主共和国のエボラウイルス病制圧に協力

長崎大学感染症共同研究拠点の安田二朗教授と吉川禄助助教、医歯薬学総合研究科大学院生のモニ・ベネディクトさんは、コンゴ民主共和国で続くエボラウイルス病制圧に協力するため、2019年11月24日から12月7日にかけて同国を訪問しました。安田教授らは、日本政府が緊急援助で同国に無償許与したエボラウイルス病検査キット（1000検査分、及び検査機器3台）による検査を担当する現地検査者のトレーニングを行ったほか、キヤノンメディカルシステムズと共同開発を進めている、常温保存可能な検査試薬（2019年5月9日プレスリリース）の検証実験を実施しました。

今回、日本政府が無償許与したエボラウイルス病検査キットは、2014～16年の西アフリカを中心としたエボラウイルス病のアウトブレイクの際に、安田教授や長崎大学熱帯医学研究所の黒﨑陽平助教らと東芝（現在のキヤノンメディカルシステムズ）が共同開発したもの。当時も、日本政府からの緊急支援としてギニア共和国に無償供与されました。

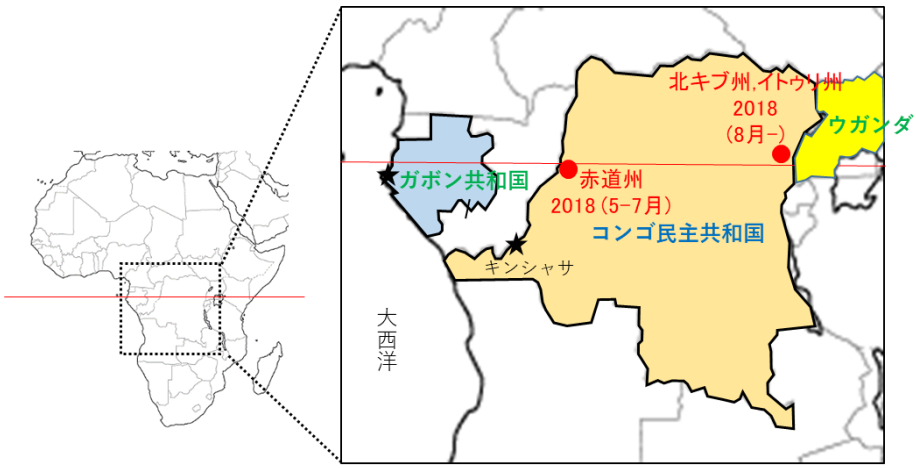
コンゴ民主共和国では、2018年8月から北東部の北キブ州やイトゥリ州で、エボラウイルス病の流行が続いています。2019年7月18日には、世界保健機関（WHO）から「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」宣言が出されています。これを受け、日本政府が緊急支援を行うことを決定し、その支援の一環として、エボラウイルス病検査キット（1,000検査分、及び検査機器3台）が同国でエボラウイルス病の検査を担当している国立生物医学研究所（以下、INRB）（所在地：コンゴ民主共和国首都キンシャサ）に供与されました。

10月23日に検査試薬、11月20日に検査機器がINRBに到着したのを受け、安田教授、吉川助教とベネディクトさんが11月24日から12月7日までINRBを訪問し、現地検査者のトレーニングと常温保存可能な検査試薬の検証実験を実施しました。今回提供された常温試薬は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）の「新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業」の研究課題である「ウイルス性出血熱に対する治療・診断・予防法等の開発に向けた研究」（研究開発代表者：安田二朗）で研究開発を進めているもので、エボラウイルス病だけでなく様々な感染症の診断にも応用可能なうえ、冷蔵・冷凍状態での検査薬の安定な輸送・保管が保証できない感染症発生地域での検査診断に役立つことが期待されているものです。

※長崎大学ホームページ掲載先
https://www.ccpid.nagasaki-u.ac.jp/20191223-2/

国立大学法人
長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

プレスリリース



コンゴ民主共和国の地図（赤丸は2018年以降のエボラウイルス病の発生地、赤線は赤道）

供与された検査機器（左）と現地でのトレーニングの様子（右）

写真左から吉川助教、安田教授、ムエンベINRB所長（2019年野口英世アフリカ賞受賞者）、ベネディクトさん

【お問い合わせ先】
長崎大学感染症共同研究拠点
電話番号：　０１２０－０９５－８１９